

懐かしき幼い頃の思い出

川崎市 坪木良雄（高士村飯田出身）

故郷が発展的に変遷することは誰しも否定する人はいないと思います。むしろ大いに喜ぶべきことでしょう。しかし、故郷を離れて五十有余年、ノスタルジアを感じるのは私だけではないと思う昨今です。あの頃、高田農学校へ通学する約十キロの道のりを自転車ならば四十分の所を歩けば二時間半かかります。上級生ともなると親に「歩いて通学しろ」と云われ止むなく徒歩で通った記憶が生々しい。

朝五時に起きてお袋が作ってくれた朝食もそこそこに巻脚絆に地下足袋姿で颯爽と家を後にしたのですが、何せ朝食が早いため腹が減って昼食時間まで待たず「いわゆる早や弁」を喰って昼食時には弁当箱が半分空っぽの始末、全くの成長盛りだったのでしょうか。時にはそれが噂になり、急に弁当検査なるものがあつ

て、先生が弁当袋を手にとらされた時の「冷や汗三斗」。空っぽの時もあれば片下りの時もあつて、これには先生も叱ってはみたものの事情を察してか苦笑いをしていました。

当時の農村の生活は苦しさの上に貧しさも加わって小さい子供でも一家の労働力として当てにされており、学校から帰ると、早速「こびり（腹）こしらえの間食」を食べて田圃へ飛んで行ったものです。しかし、そんな厳しかった事ばかりではなく、それなりに楽しかったことも多かつたような気がします。

その頃の水田は自然の地形そのまま川縁りには猫柳やら水草がたくさん生い茂っていて雑魚の絶好の住み家だったのか鱈、鮎、タナゴ、鯉などが沢山いて子供でも簡単に箆で掬って捕らえられました。私はその雑魚ひきが好きて御袋が大

事にしていた新調の箆を持ち出してはよく叱られたものです。また、七月から八月の土用の暑い頃は稲も大きく生長すると同時に鱈も大きく肥えているのでよく柳川に使う鱈とりが行われていました。夕方になると田螺を潰してその中へ炒った米糠をまぶしたものを「つづ」（竹を漏斗状に網んだ仕掛け）の中へ団子状にして入れ、鱈の居そうな田圃に仕掛けておき、翌朝「つづ」を持ち上げた時の大漁の感触は格別なものでした。また、特に雪融け後の田圃の排水口の下を掘じると柳鱈（小さい鱈）が沢山いて手で拾うように簡単に捕えたことが昨日のように感じられます。

